



報道関係各位

看護の日・看護週間
News Release

2016年10月25日
公益社団法人日本看護協会
Japanese Nursing Association

2017年「看護の日・看護週間」中央行事

～「看護」の現場で出会った、心温まるエピソードのコンクールを開催～

第7回「忘れられない看護エピソード」募集

募集期間：2016年11月1日（火）～2017年2月3日（金）

【看護職部門】と【一般部門】の2部門で募集！

公益社団法人 日本看護協会（所在地：東京都渋谷区／会長：坂本すが）は、5月12日の「看護の日」と同日を含む日曜日から土曜日までの1週間を「看護週間」として、「看護の心をみんなの心に」をテーマに毎年様々な事業を実施しています。その一環として看護職や一般の方々を対象に「看護」の現場で出会った心温まるエピソードを募る、第7回「忘れられない看護エピソード」の募集を11月1日（火）～2017年2月3日（金）まで行います。

募集部門は、看護を行う側の看護師などを対象とする【看護職部門】と、看護を受ける側の患者さんやご家族を対象とする【一般部門】で、各部門の最優秀賞の方には賞状及び賞金20万円を進呈いたします。また、最優秀賞・内館牧子賞を受賞した2部門合計4作品の中から1作品をショートムービー化（約2～3分）し、表彰式や本会ホームページなどで発表する予定です。

審査は特別審査員の内館牧子さん（脚本家）、ゲスト審査員、厚生労働省、日本看護協会関係者などが行い、来年5月7日（日）に日本看護協会ビルで行う表彰式や新聞広告、本会のホームページなどで受賞作品を発表する予定です。また、受賞作品発表後には、ご応募いただいた方々全員に第7回受賞作品の小冊子をお送りします。



内館牧子さん(脚本家)

2016年度は2部門合計3,305作品が集まり、素晴らしい作品を通じて多くの方々に看護の大切さを感じていただく機会となりました。2017年度も第7回「忘れられない看護エピソード」の募集を通して、より多くの方に看護の大切さを認識してもらい、看護の心を育んでいく一助になればと考えております。

<看護の日について>

「看護の日」の5月12日は、近代看護を築いたフローレンス・ナイチンゲールの誕生日にちなんだもので、中島みち氏（ノンフィクション作家）の発案・呼びかけにより日野原重明氏（医師）、橋田壽賀子氏（脚本家）、柳田邦男氏（作家）など、市民・有識者による「看護の日の制定を願う会」の運動をきっかけとして、1990年12月に制定されました。以来、5月12日を含む日曜日から土曜日までを「看護週間」とし、毎年、厚生労働省と日本看護協会が中心となり、全国各地で看護に関係したイベントや活動を行っています。



<報道関係のお問い合わせ先>

第7回「忘れられない看護エピソード」広報事務局 担当：副島、石川、森田

TEL：03-3583-6157 FAX：03-3583-6208

<第7回「忘れられない看護エピソード」募集要項>

- 【部門・応募資格】： ①看護職部門…現在、国内で看護職に就いている方、または過去に看護職に就いていた方
②一般部門…日本国内在住の方
- 【募集内容】： 「看護」を通して得られた忘れられない思い出やエピソードについて800字以内でまとめてください。(原稿用紙／ワープロ、縦書き／横書き、いずれも可)なお、作品には必ずタイトル(題名)を付けてください。
※応募は一人一作品、本人作の未発表作品かつ日本語で書かれたものに限ります。判読不明な文字、不鮮明な文字は審査の対象外となる場合がありますので、必ず楷書で書いてください。なお、ご応募いただいた作品は返却しませんので、ご了承ください。
- 【募集期間】： 2016年11月1日(火)～2017年2月3日(金)※当日消印有効
- 【応募方法】： 作品と次の必要事項を記入した用紙(書式自由)を添付して、下記宛に郵送するか、日本看護協会のホームページからご応募ください。※ハガキ、FAXでの応募は不可。
①応募部門(看護職部門／一般部門)②郵便番号・住所 ③氏名 ④年齢 ⑤性別
⑥電話番号 ⑦メールアドレス(ある方のみ)⑧職業 ⑨勤務先と免許取得年(看護職のみ)
- 【応募先】： 郵送⇒〒105-0003
東京都港区西新橋1-18-14 第2須賀ビル4階
第7回「忘れられない看護エピソード」事務局
日本看護協会ホームページ⇒<http://www.nurse.or.jp/episode/>
※専用フォームからご応募できます。
- 【賞金・賞品】： ■最優秀賞…賞金20万円(各部門1作品)
■内館牧子賞…賞金10万円(各部門1作品)
☆上記受賞作品の中から1作品をショートムービー化予定。
■優秀賞…賞金3万円(各部門3作品)
■入選…ナースキティオリジナルぬいぐるみ(各部門5作品)
□応募者全員に第7回受賞作品小冊子をお送りします。 ※いずれも予定
- 【審査員】： 特別審査員 内館牧子さん(脚本家)、ゲスト審査員、厚生労働省・日本看護協会関係者などで審査。
- 【主催】： 厚生労働省、日本看護協会
- 【発表・表彰】： 2017年5月7日(日)に開催する表彰式で発表。最優秀賞及び内館牧子賞の受賞者には表彰式に出席していただきます。また、日本看護協会のホームページ(<http://www.nurse.or.jp/>)および機関紙、新聞紙面(上位作品のみ)などにも受賞作品を掲載するほか、ショートムービー化した作品は日本看護協会のホームページやWEB上でも活用する予定です。
※選出・選定基準及び方法などについての問い合わせには応じかねます。
※入賞のご連絡は、表彰式での作品発表をもってかえさせていただきます。
- 【留意点】： 1)入賞作品は、応募者の氏名・年齢・都道府県名等と共に公表いたします。また、最優秀賞(各部門1作品)もしくは内館牧子賞(各部門1作品)の計4作品の中から、1作品をショートムービー化します。
2)応募に際しては、作品に登場する人物や病院等の施設が特定されないようにご配慮下さい。患者・家族・施設等の関係者の了承を得ることが難しい場合は、当該患者・家族・施設等の関係者が不快にならない表現をお願いします。作品中のプライバシー、個人情報に関して主催者は一切の責任を負いかねます。
3)医療安全、倫理基準など現代と状況が異なる、または不適切な表現があった場合のほか、入賞作品を公表する際の漢字表記の統一など、主催者の判断で修正させていただくことがあります。
4)入賞作品の著作(使用)権は全て日本看護協会に帰属するものとします。
5)応募作品は、「看護の日・看護週間」事業のほか、看護および看護従事者のイメージアップや社会的評価向上のための広報活動(書籍への転載含む)などに使用します。
- 【応募に関するお問い合わせ先】： 第7回「忘れられない看護エピソード」事務局
電話:03-5510-4802 担当:大津、小浦 E-mail:info@kango-kyokai.jp
受付時間:10時～18時(土日祝日・年末年始除く)

＜公益社団法人 日本看護協会 概要＞

名 称：公益社団法人 日本看護協会
所 在 地：〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-8-2
TEL.03-5778-8831 URL <http://www.nurse.or.jp>
会 長：坂本すが
設 立：1947年
概 要：保健師・助産師・看護師・准看護師の資格を持つ個人が自主的に加入して運営する、日本最大の看護職能団体。現在約 71 万人の会員が加盟し、47 都道府県看護協会（法人会員）と連携して活動する全国組織。国民の健康と福祉に寄与するため、看護職能団体として質の高い看護サービスを提供するための活動を展開中。

おもな活動：○安全な看護の提供と質の向上
○在宅医療・訪問看護の推進
○看護・医療政策の提言とその実現
○専門看護師・認定看護師・認定看護管理者の教育と認定
○看護職の人材確保・就業促進
○継続教育の推進
○保健医療福祉の連携促進
○広報活動
○日本看護学会の開催など研究の振興
○国際交流
○調査研究
○ワーク・ライフ・バランスの推進

忘れられない看護エピソードの
続編が登場します！

「いのち輝く いい話②」

看護する人、看護される人の“感謝の想い”がいっぱい詰まった、読む人の胸にジンと響く珠玉の作品集。2013年に刊行した「忘れられない看護エピソード」の本「いのち輝く いい話」に、待望の第2弾が発売されます。今回は第4回～第6回の応募 10,260 作品の中から、受賞作を中心に 87 篇を収載しています。



■書名：いのち輝く いい話②
■編者：公益社団法人 日本看護協会
■発売：河出書房新社
■判型：四六判ハードカバー

■発売日：2016年10月25日
■定 価：1,200円（税別）
■頁 数：200ページ

■参考資料 第6回「忘れられない看護エピソード」最優秀作品

【看護職部門】「専属ナース物語」 長崎県 庄崎 美恵さん

「お前は最低の看護師だ！」

これは、2013年の寒い冬の夜、ある患者さんから言われた言葉です。「ある患者さん」というのは、私の父です。父は肝硬変を患い、私が勤務する病院に入院し、治療を受けました。その闘病生活はとても厳しいものでした。私は介護休暇を申請し、そばに付き添う生活を送りました。看護の仕事に就いて15年。初めての経験でした。

私は、看護師であるプライドと家族からの期待を裏切らないように、毎日自分の力の限り、必死で付き添いました。しかし、父は夜間にせん妄状態になることがあり、そのたびに「なんで私を困らせるの？」とつぶやきながら、布団に潜り込んで号泣しました。

「お前は最低の看護師だ！」という言葉も、せん妄状態の父が発した言葉でした。私は、父から言われたというショックと、看護師としてのプライドが一気に崩され、父の部屋を飛び出し、待合所で号泣しました。そして、いつの間にか寝てしまいました。

その夜に不思議な夢を見ました。幼い私と若い父。私が楽しそうにワープロを教えてもらっている風景。次は、苦手だった数学を教えてもらっている風景。次から次に場面が展開し、まるで物語のような夢を見ました。気付くと窓から日が差していました。その朝は、とても不思議な気持ちになり、逃げ出したはずの父の病室に自然と駆け寄りました。

父の寝顔を見て「もしかして、今度も私に何かを教えたいのかもしれない」という思いが私の心の中に舞い降り、その瞬間に柔らかい涙が頬を流れました。

その日から、夢の続きの「専属ナース物語」が始まりました。

介護休暇が終わり、仕事に復帰した私は、日中は看護業務を、夜間は私服に着替えて父の付き添いをしました。父は、白衣を着た私には厳しく、あいさつや立ち姿、環境整備などを細かく評価し「お前は心遣いが足りないことが多すぎる」「お前の看護はアイデアと発明が足りない」といった感じで、毎日叱ってくれました。でも、白衣を脱いで「娘」に戻ると「お前の仕事は大変だ。体を大事にしなよ」と温かい声を掛けてくれました。

いつの間にか、家族の病気という大きな出来事も、私に与えられた素晴らしい時間なんだと思えるようになりました。

「お前もいい看護師になってきたな」と言ってくれた1カ月後、父は家族に囲まれて旅立ちました。時が経ち、父の友人から「お父さんは『俺の専属ナースは最高の看護師だ』って、美恵ちゃんのことをいつも自慢していたよ」という話を聞きました。そのとき、涙があふれ、目の前の父の写真がゆがんで見える中、「お前に合格点をやる。専属ナースはたくさんの人を助けなさい」という声が聞こえた気がしました。

私は、今もその場所で働いています。時に叱り、時に褒めてくれた父の言葉を胸に、私のナース物語は、これからも続きます。

【一般部門】「静かな勇気」 滋賀県 高野 裕子さん

12年前の冬、ある病院で私の夫は最期の時を迎えようとしていました。まだ35歳。闘病の3年間、手術や抗がん剤治療を繰り返しながら、当時はまだ珍しかった病院内での「患者と家族の会」も立ち上げ、精一杯、病氣と闘ってきました。そして、よく笑う幼い2人の子どもたちと穏やかで幸せな日々を送っていました。

しかし、病は夫の体の自由を奪い、感覚を奪い、次第に意識をも奪っていきました。痩せた体は驚くほど脚がむくみ、私一人では抱えきれない状態になりました。

そんなある日、私は夫の着替えを手伝っていている看護師のUさんのお腹が大きくなっていることに気付きました。もっと早く気付いても良かったはずですが、日ごろからお腹をかばう様子も見せず、いつもキビキビと動き回る姿はとても妊婦さんには思えなかったのです。

遠慮がちにUさんに聞くと、やはり赤ちゃんがいるとのこと。すぐほかの看護師さんに代わってもらおうようお願いしました。が、Uさんは聞き入れてくれません。夫の体は相当な重さです。夫の体を抱えたとき、ベッドの縁がUさんのお腹に当たりぐにゅっと食い込むのが見えて、思わず声が震えました。

「お願いだから誰かに代わってもらいましょう。彼はとても子どもを大切にします人です。もし彼が話せたら、きっと『やめて』って言うと思います。だからもうやめて、お願いだから……」

その時、必死で懇願する私にUさんは言いました。

「実は、私はあしたから産休に入ります。きょうが高野さんのお世話がができる……たぶん最後の日になると思います」

「最後の日」と言うUさんの顔がゆがみました。全ての意味を含んでいるのが分かりました。「私たちは今まで高野さんと奥さんのがんばりをずっと見せてもらっていました。諦めない明るいお二人を見ながら、今のどうしようもない現実がとてもつらいです。その目は真っ赤で、今にもこぼれそうなほど涙が浮かんでいました。

「高野さんの姿を見ながら、この子が生まれる意味を私はとても感じさせてもらっています。だから今日は私にやらせてください。絶対、無理はしませんから……」

その後、Uさんと私は一緒に泣きながら、笑いながら、そして夫とお腹の中の赤ちゃんに話し掛けながら、時間をかけて夫の着替えを終えました。

逝くことと生まれくること……。そして、それらに添って見守ることを私たちはそれぞれの立場で共有していたのでしよう。それは、途方もなく寂しくて、温かく優しい時間でした。現在、私は「入院患者と家族のためのサポートハウス」を作ろうと奮闘しています。小さくてもいいのです。あのときもらった優しい時間と静かな勇気を同じ立場の誰かに届けたいと思っています。

あのときの赤ちゃんは、きっともう12歳。あの日からずっと会いたいと思っています。忘れたことはありません。Uさん、もし会えたら抱きしめてもいいですか？

「あのときは、協力してくれてありがとうね。あなたと、あなたのお母さんがくれた勇気を、今でもうれしく覚えているのよ」